

石油とドル

米国が世界一の石油生産国になる。IEA(国際エネルギー機関)によれば、2010年代にサウジアラビアを抜いて世界一の石油生産国になり、ロシアを抜いて世界一のガス生産国になる。そして20年もすればエネルギーの自給自足が達成する見込みだ。シェールガス、オイルのおかげだ。

そうなれば原油などの輸入の必要はなくなり、米国の経常収支は大幅に改善する。2011年の米国の経常収支の赤字はGDPの3.1%で、12年、13年の見通しも3.1%だ。(IMF WEO)これが1%台の赤字程度になる可能性があるということだ。

それでドルは長期の上昇トレンドに入るとの見方が出てきた。だが果たしてそうだろうか。

既に米国の原油輸入は低下傾向にあり、将来のエネルギー大国への変貌は経済的ばかりでなく、政治的にも軍事的にも世界の情勢を変える可能性が高い。それゆえ IEA の見通しは一層センセーショナルになる。

だがシェールガス、オイルの生産が今後も持続的に維持される保証はない。生産技術の発展は著しいが、生産コストは高い。原油価格が高値で推移している間は生産の拡大が続くが、そうでないと難しくなる。サウジの生産コストのほうが安い。環境問題もある。その点では IEA の見通しは楽観的だ。

もう一つは経常収支とドルの関係だ。確かに米国の経常収支の改善は為替の需給に影響する。原油輸出国のドル売りが減るからだ。しかし経常収支のドル相場に与える影響は長期的に低下している。資本取引や投機為替の比重が圧倒的に高まっているからだ。つまり米国の経常収支の改善はドル高要因の一つに過ぎず、それでドル高傾向が決まるわけではない。